高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会共催事業

「龍馬脱藩160年 維新へつながる土佐の道」記念講演会

企画展

「龍馬脱藩への道」

龍谷大学特任講師・現代龍馬学会理事　髙山　嘉明

文久2（1862）年3月、龍馬は無断で国境を越えた。いわゆる脱藩（当時の記録には「出奔」「脱走」「亡命」などと表記される）である。この龍馬の脱藩については、専門家を含め、一般的に〝明るい〟脱藩というイメージでとらえられる傾向にある。その理由は、脱藩という行為に、志士として出発する龍馬の漠然とした可能性、いわば〝無限の可能性〟を見るからであろう。ただし、この出発点が、学術的観点から本格的に論じられる機会は多くない。はたして龍馬の脱藩は〝無限の可能性〟を持ったものだったのだろうか。

注目すべきは、龍馬の脱藩前の行動である。文久元（1861）年、龍馬は讃岐国丸亀での剣術修行のため、土佐を出国した。この時の出入国は、正規の手続きを経ている。ただし、周知の通り、丸亀行きは単なる剣術修行にとどまらず、志士的活動を伴った。そして、この修行から帰国して間もなく、一人の志士として脱藩を決行する。しかし、そうであれば、なぜ龍馬は丸亀行きに乗じて脱藩せず、わざわざ一旦帰国したのかという疑問が生じる。その理由は明快で、この時龍馬は、勤王党の一員として活動したのである。龍馬は、丸亀から長州へ渡り、長州藩の久坂玄瑞と面会して武市半平太からの書状を渡し、そして逆に久坂から武市への書状を受け取り、土佐に帰国してこれを武市のもとに届けた。この久坂の書状で、「草莽志士」が「糾合」して「義挙」に及ぶべきこと（草莽崛起）が唱えられ、「尊藩」（土佐藩）や「弊藩」（長州藩）が「滅亡」したとしてもそこに「大義」があれば問題ないという刺激的な論が説かれたことはよく知られている。実際に久坂と面会した龍馬が、書状に認められたような彼の思想に触れなかったとは考え難い。直後に決行された龍馬脱藩の直接のきっかけをこれに見るべきだろう。なお、土佐からの最初の脱藩者とされる吉村虎太郎は、自分に続いて脱藩者が「十余人も来るへし」と久坂に伝えている。その数に龍馬が入っていたことは十分に考えられる。事実、脱藩の際、龍馬の足取りは長州へ向かっている。

ところで、龍馬の脱藩を広く理解するためには、他の脱藩者の事例も勘案し、土佐藩全体の脱藩事情を知ることが肝要である。まず、北添佶磨の事例を概観すると、彼は文久2年10月、「眼疾」の「療治」のため土佐を出国した。これは正式な手続きを経たものだったが、結局そのまま帰国することなく、京都を中心として政治活動に従事した。ただし、京都滞留が問題視されるようになって以降も、佶磨のことは藩の公文書に「庄屋佶馬」と記され、藩における庄屋身分は保障されたままだった。出国のおよそ1年後、帰国命令に佶磨が叛いてはじめて、藩は「出奔致候佶馬」（脱藩した佶磨）との認識を示した。この佶磨の事例は、〝脱藩＝国境を越えること〟という常識が大きな誤解であることを示唆する。龍馬の脱藩を基準にすれば、国境を越えることがその主要な条件のように思われるが、実は佶磨のように脱藩の際すでに国外にいた例も多い。次に、沢村惣之丞の事例である。しばしば沢村は〝二度脱藩した〟と説明される。彼の行動をたどると、文久2年3月初旬、吉村虎太郎とほぼ同時に無断で国境を越えて長州へ行き、その後武市半平太への情勢報告のため帰国、そして同月末、龍馬と共に再度国境を越えた（これが龍馬の脱藩）。沢村が二度無断で出国したことは間違いないが、ここでの問題は〝帰国＝脱藩状態の解除〟なのかという点である。勝手に出国して勝手に帰国した沢村の事例に、この条件を当てはめるには無理がある。沢村が〝二度脱藩した〟という理解こそ、〝出国＝脱藩〟でなければならないという固定観念にもとづいた誤解にほかならない。

龍馬脱藩の意義を考えるにあたり、特に強調すべきは、全国的活動を展開する志士としての龍馬の出発点の重要性である。その点において、龍馬は明らかに長州藩系志士として登場した。脱藩の際の龍馬は決して〝孤高の人〟ではなく、また脱藩をめぐる龍馬の思想・行動が独創的であったとも言えない。ただし、龍馬の独自性は、このように長州藩系志士として登場しながら、その後薩摩藩への接近が見られる点であろう。〝薩長の仲介者〟としての龍馬評は議論が尽くされた観もあるが、その一方の素地が、脱藩の段階ですでに備わっていたことに、もっと注目してよいのではないだろうか。その反面、一人の志士としてその後の政治活動を見通して評価するならば、龍馬の脱藩に〝無限の可能性〟というドラマチックな評価を与えることには慎重になるべきだろう。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会総会

研究発表会

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は6月4日、坂本龍馬記念館新館ホールにおいて、第14回総会・研究発表会を開催した。

昨今の新型コロナウイルス流行状況を鑑み、総会は昨年と同様、書面決議とした。本会は今年度より事業計画を見直し、年4回行われる龍馬記念館の企画展記念講演会を龍馬学会との共催とすること、同講演会をWEB配信すること、観覧招待券や企画展小冊子等を会員に配布するなど新たな事業計画を立て、承認された。

研究発表会は、会員2名による研究発表を午前・午後にわたりおこなった。午前の第1部では、理事の今井章博氏が、明治39年の龍馬・慎太郎四十年忌祭を報じた「土陽新聞」の記事より、龍馬の北辰一刀流皆伝が追贈された可能性のあることを報告された。続く午後の第2部では、昨年度まで龍馬記念館学芸員であった高山嘉明氏（現・龍谷大学特任講師、現代龍馬学会理事）が、学芸員として最後に担当した企画展「龍馬脱藩160年　維新へつながる土佐の道」に関連して、改めて「龍馬脱藩の道」をめぐる諸説について考察を加えられた（高山氏の講演は7月4日～19日の間、龍馬記念館HPで配信）。いずれも従来の龍馬像に新たな知見を加えた興味深い報告であった。

第14回　高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会総会　研究発表会　当日次第

「龍馬研究の水準を高め、龍馬の真実を追究し、その精神を現代に生かそう」

日時／2022年6月4日（土）
9時～15時
会場／高知県立坂本龍馬記念館
新館ホール

9時　総会（書面決議報告）
9時40分　研究発表会開会
・会長挨拶
・来賓挨拶
高知県教育次長　黒瀬　渡　氏
高知市教育次長　山中　浩介　氏

10時　第1部　研究発表会
「坂本龍馬・中岡慎太郎両氏の四十年忌祭から分かったこと　龍馬の北辰一刀流兵法皆伝等は追贈されたものか？」
今井　章博　氏（現代龍馬学会理事）

13時30分　第2部　研究発表会
〈龍馬記念館令和4年度企画展記念講演会〉
「龍馬脱藩への道」高山　嘉明　氏
（龍谷大学特任講師・当会理事）

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会第14回総会書面議決のご報告

新型コロナウィルス感染拡大防止のため、2022年度の事業計画や予算等の総会審議事項については事前に書面議決を行いました。

その結果は次の通りです。

会員数　96名
第1号議案（1）（2）（3）
承　認　71名　回答なし25名
第2号議案（1）（2）
承　認　71名　回答なし25名

以上により規約第9条（議決）に基づき、すべての議案について、過半数の承認をもって可決されましたことをご報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
会長　宮　英司

坂本龍馬・中岡慎太郎両氏の四十年忌祭から分かったこと

龍馬の北辰一刀流兵法皆伝等は追贈されたものか？

現代龍馬学会理事　今井　章博

明治39年11月15日に坂本中岡両氏四十年忌祭（以下祭典と称す）が京都霊山招魂社で挙行された。

祭典に招待を受けた谷干城は快諾の返事と共に「当時野夫も在京中、殊ニ親敷相交、横死之時ハ近隣ニ止宿いたし居候故、直に馳付候。当時之情況を想像スルも今猶慨然ニ不堪候。」と返書を送った。

祭典には坂本家の遺族代表として故直の妻、留が出席。

宮内大臣を務めていた田中光顕は、同日に横須賀で挙行された「軍艦薩摩」進水式に天皇陛下行幸の為、随行し祭典は欠席。同じく佐々木高行、土方久元の宮内派も同様で、三人の連名で祭祀料が贈られている。

霊山招魂社の近く麓翠紅館では、両氏に馴染みの遺物が展示され、それらは、『坂本中岡両氏遺墨紀念帖』に収めらると、参列者に配られた。

この祭典から遡る事、二年前の明治37年、日露戦争が勃発し4月13日付『時事新報』の「葉山の瑞夢」記事を皮切りに、龍馬の神格

化が始まる。

こういう状況下で開催された祭典の模様は『土陽新聞』にも5日遅れで報道された。そこには特筆すべきことが書かれていた。

「坂本氏が故千葉周作氏の門に入り剣道を学びたるは洽く世の知悉する処にして確かに免許以上の資格を有し中伝位の地位にありし由なるが今回千葉家より坂本氏に対し免許皆伝を送り来り、其霊を慰むる事とせり」（11月20日付）

その後、明治43年に入り、祭典では展示がなかった巻物3本が突如出現する。

坂本弥太郎が明治43年8月30日付で留に宛てた借用証控には「北辰一刀流兵法箇条目録」「同兵法皆伝」「同長刀兵法皆伝」が記載されている。

そして昭和4年5月に開催された「土佐勤王志士遺墨展覧会」出品目録控には「附記、千葉周作ヨリ受ケタル皆傳目録ハ全部焼失セリ 於釧路市」とある。

祭典半年前の4月に維新に活躍した人物の功績をその子孫が述懐するという『勤王烈士伝』が編まれた。龍馬の著述者は坂本兼太郎となっているが、一族に兼太郎という人物はおらず、住所も浦臼村となっているので坂本弥太郎と思われる。一族に伝わる史料がどのように反映されているかをみると、当時直衛所蔵の詠草「世の人は何とも云はゝいへ…」、弥太郎所蔵の「修行心得三カ条」などが披歴されているが、肝心の千葉道場での記述は「龍馬は千葉周作の門に入りて、十分其技に上達しければ、イザさらば諸国を回りて他流試合をなさんものと…」とのみ。この時点で一族のもとに北辰一刀流免許皆伝等があれば、このような記述に終始することはあり得ない。

「龍馬の遺品や遺墨は坂本直からその子直衛、直寛から弥太郎とそれぞれに相続されていったが、残念なことに、直衛が相続した品は他に売り飛ばされた形跡がある。例えば、龍馬が千葉定吉から伝授された「北辰一刀流長刀兵法目録」、これは米国シカゴ在住の高知県出身者が昭和38年に当時の高知県知事溝淵増巳氏に売り、同氏の死後高知桂浜龍馬会の所有に帰しているが、これは直衛が北米航路の船に乗っていた時に売ってしまったのである。」（土居晴夫著『坂本龍馬とその一族』より）

「北辰一刀流長刀兵法目録」については様々な議論があり、土居晴夫さんは『土佐史談』170号（龍馬生誕150年紀念特集号）に「揚げ足を取るようで気がひけるが、佐那女は天保14年（1843）生まれで安政5年（1858）当時16歳であったから、佐那女はともかく他の二人の妹はまだ年少者であって、いくら剣術家の娘でも、それにふさわしい剣技を身につけていたとはとても思えない。」

同じ号に高本薫明氏は「千葉灸治院」で「妹里幾は安政二年労咳で死し」とし目録が発給された安政5年には、生存してないことになるが、この矛盾を解決するため佐那の回想に典拠のない逸話を盛り込む。「（父は）翌5年1月北辰一刀流目録を与えましたが、坂本さんは目録の中に私達三姉妹の名も書き込む様に頼んでおりました。」佐那の回想では豫州伊達侯の姫君政子には「妄許すに免許皆伝を以てしたり」とあるが、龍馬への免許皆伝については何等語っていない。

なお、高本氏の研究では佐那は天保9年の生れ。（「墓碑五題」『土佐史談』135号）

最後にあくまで私論であるが、明治39年11月に千葉家から「北辰一刀流兵法箇条目録」「同兵法皆伝」「同長刀兵法皆伝」「同長刀兵法目録」の4本が発給され、そのうちの一本「北辰一刀流長刀兵法目録」を直衛が持出し、売り払った。他の3本は釧路市の大火で焼失したと考えるのが妥当と思われるがいかがだろうか。

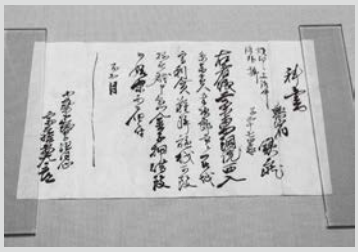
この龍馬の北辰一刀流免許皆伝等については様々な研究がなされているが、明治39年の土陽新聞記事を踏まえての検証はなく、今後の課題である。

当館SNSより旬のトピックをお届けします。フォローをお願いします。

夏の特別展示②
岡田以蔵科書（とががき）
（カテゴリー…常設展示）

土佐藩の下級武士である岡田以蔵は、幕末に「人斬り以蔵」と恐れられた人物ですが、最近は、ゲームなどで人気が高いようです。現在、常設展示室では、「夏の特別展示」として「岡田以蔵科書（とががき）」（土佐藩京都藩邸史料より、当館所蔵）を展示しております。「科書」とは、今でいう「罪状文」です。勤王党から離れ、土佐藩からも脱藩した以蔵は「無宿人鉄蔵」として、京都東町奉行所に捕縛されます。さて、その罪状は何だったでしょうか。ぜひ、展示室でお確かめください。

#岡田以蔵　#藩邸史料


以蔵科書

7月15日（金）インスタグラムより

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十九）―

恋と剣戟

宮川 禎一

循環器系の急病で入院中に病室のテレビで古い映画を観まくっていた（入院費の内）。『ローマの休日』や『カサブランカ』や『オズの魔法使』などを観ては「名画はやっぱり名画だなあ」などと病人なのに感心していた。その中で一番繰り返し観た映画のことを書きたい。『ロビンフッドの冒険』という一九三八年のアメリカ映画だ。八十年以上も前の作品だが総天然色テクニカラーが目に鮮やかだ。

映画は十二世紀末のイングランドが舞台だ。獅子心王リチャードI世が十字軍として大陸に遠征し、留守となったイングランドでノルマン人勢力と結託した王弟のジョンが王位を狙って暴政を行うのだが、シャーウッドの森のロビンフッドがそれに敢然と立ち向かうという時代劇である。主役のエロール・フリンは甘いマスクで足長で、衣装は緑色で、これは人気があったであろう。その恋の相手役であるマリアン妃（笑顔の素敵なオリビア・デ・ハビランド。のちに『風と共に去りぬ』で準主役）は最初ロビンにつんけんしていたものの、あとでベタ惚れするという絵にかいたような「ツンデレ」のお姫様であり、その衣装も豪華でデザインも色彩も素晴らしい。

鎌倉の源頼朝墓
（リチャードI世と同世代の人）

もっと素晴らしいのは脚本だ。心躍る剣戟シーン（剣を上段に構えた豪快な西洋ちゃんばら）とロマンスと笑いとが絶妙にバランスされていて、ずっとハラハラ・ドキドキである（心臓に悪い?）。映画の終盤では獅子心王が帰国して大剣戟戦の末に弟ジョンを国外に追放。ロビンフッドは王から伯爵の称号と領地をもらい、さらにはマリアン妃と結婚してめでたしめでたしの大団円である。

映画を観ながら「これはスターウォーズ第三作にあった森の中の戦闘シーンだ」などと後世の映画に大きな影響を及ぼしたことも分かる。これを観て監督や脚本家や役者や衣装担当者など映画産業に身を投じた人が沢山いたはずだ。さらには少年少女が「十字軍のことをもっと知りたい」などと思って歴史学者にもなっただろう。大河ドラマを観て日本史の研究者になった人が多いのと同じだ。映画が歴史研究にも影響を与えるという話である。

これからの現代龍馬学会

会長　宮　英司

今年の現代龍馬学会にご参加いただいた方々には、以前の現代龍馬学会との違いが鮮明になったのではないでしょうか。一昨年度のコロナ禍による中止、昨年度のリモート開催を経て、今年度は理事会でも協議を重ねた末に新しいスタイルを少しだけ打ち出すことができたかと思っています。

何がどう変わったかを列挙してみますと、①現代龍馬学会と企画展講演会のドッキング、②会員の特典の明確化とＰＲ、③「宣言」の廃止、④「会報」の発行回数の見直し、⑤会費の納入方法（手数料の低減策の周知）、⑥発表は「龍馬」にこだわっていこう、⑦理事会のシンプル化…ということになるでしょうか。

①については連続講演会がスタートする時から「この連続講演会こそが現代龍馬学会ではないだろうか。」という指摘もあり、紆余曲折を経て、今回の企画展講演会とのドッキングとなった次第です。

②については、企画展講演会の要旨などの「会報」や、館だよりなどの配布に加え、企画展小冊子の配布等へと拡充されました。この小冊子配布は、ご多忙で企画展を見逃した方々にはたいへん喜ばれることと存じます。

③については、毎回の発表会のラストに実施していましたが、研究発表と宣言は馴染まないとの判断で今回からなくなりました。

この「企画展講演会と現代龍馬学会研究発表会」を一緒にお届けする新しい方式は、現代龍馬学会理事・龍谷大学特任講師の髙山嘉明様の「龍馬脱藩への道」と現代龍馬学会理事の今井章博様の「坂本龍馬・中岡慎太郎両氏の四十年忌祭から分かったこと～龍馬の北辰一刀流兵法皆伝等は追贈されたものか？～」でスタートいたしました。どちらも目の肥えた龍馬ファンの皆様に喜んでいただけたことと思います。

以上、いくつかの変更点を挙げましたが、新しいスタイルで実施した直後の理事会において、更なる見直し案が出てまいりました。それは午前の部は総会だけに充てて、午後の部に「企画展講演会と現代龍馬学会研究発表会」を連続して実施しようというものです。

本会創立の趣旨には「坂本龍馬の思想と行動に学び、その精神を今日に生かそうとして高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は発足いたしました。……。」と記されています。私たち会員一人ひとりが、創立時の情熱に学びつつ、新しい現代龍馬学会を築いていきたいと考えています。

個人的な視点を言えば、会員の交流を活性化するための「ハガキ投稿」にもう一度チャレンジしてみたいと思っています。さらに、次代を担う子どもたち向けに現代龍馬学会として何ができるかを検討してみてもいいのではないかと考え続けています。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp